

痛ましき、されど勇ましき

何とも云へぬ彼の顔を見よ、汝よ

そして又汝の顔を見て見よ

何と云ふ傷ましい

泣き叫び度いやうな表情を

彼はしてゐるか

何と云ふ恐ろしいものを

何と云ふ不合理を

何と云ふ悲惨を

何と云ふ見るに堪えないものを

彼は見て、感じてゐるのであらう

彼は泣いてゐるのだ

しかしその溢るるが如き涙は

叫びが口から出ないやうに

その脅かされた眼から出ることが出来ない

そして彼は自ら泣いてゐることを知らない

彼はフローレンス人の暴虐を見てゐるのか

罪なきものゝ残殺されるのを見てゐるのか

戦争の惨劇におのゝいてゐるのか

或は自己が戦士であることを彼は忘れたのか

否、彼は知つてゐる

何もかも知つてゐる

自己が戦士であることも素より知つてゐる

そしてその使命の意識が
更に内から彼を責め呵んでゐる
されど彼は何よりもよく知つてゐる
自己の力を
彼は力強い
されどその力を以てしても
どうするとも出来ない運命を彼は知つてゐる
さうして絶望は彼の上に来る
彼は誰よりもその齒痒ゆさを知り
そのもどかしさの苦しみを味つてゐる
而も彼は眼のあたり見てゐるのだ
この恐るべき悲惨を

この恐ろしい不合理を

彼の苦しみや大きい

彼の悩みや深い

彼はフロレンス人かも知れない

しかし彼の立場はフロレンスにはない

彼は十五世紀の人間かも知れない

しかし彼の立ち場は十五世紀にはない

彼は永遠の立ち場に立つて

人類の窓からものを見てゐる

かくも痛ましい

沈黙を強ゐられながら

じつと其の上に眼を向けてゐる
されど彼の煩悶や空しくない
智者である彼こそ眞の勇者だ
彼はその恐ろしき沈黙によつて
何よりも多く語り
その痛ましき拷問を
噛みしめるところによつて
より強く育つてゆく
鍛へられてゆく

ダ・萍ンチの描く男の顔を見よ
小さき汝よ

彼の深刻なる表情を見よ
ぞして又汝の簡單にして淺墓なる
顔を見て見よ
彼こそは男だ
ある時は帝王の尊嚴をもて
ある時は異端者の冷靜をもて
鬼神の如き怪力をもつ彼は
己が運命に横はる
あらゆる恐ろしき苦悶に
啞の如く黙つてこらへて
されど力強く、雄々しく
静かに歩きゆく戦士だ

ダ・ギンチの女

ダ・ギンチの描く女の顔を見よ
かの崇高なる静けさを見よ
淨らかなる、美しき
冷かなる、されど温き
かのいと高き愛の面持おもてを見よ
いかにつゝしみ深く
いかに用心深く
いかに嚴かに
いかに柔和に

彼女のほゝ笑めるを見よ

彼女は幸福なのか

法悦に充ちてゐるのか

されど何人も彼女の笑ひ聲を聞かない

たしかに彼女は不幸ではない

常に平和なる彼女の顔は

苦痛の影に亂されてゐない

彼女の中には静かなる幸福と

神聖な悦びとが晝の如くに

たちこめてゐる

されど彼女は唄ふことを知らない

喜びの笑ひは

彼女の口許迄押し寄せて來てゐる

幸福の歌は

その柔やかなる喉許に上らんとしてゐる

されど彼女はその何れをも

口に出すことが出来ない

彼女の微妙なる唇はかすかに

顫ふことあるとも

そは永久に閉じて開くことを知らない

彼女は恐れてゐるのだ

盲目なる運命に對するおのゝきが

彼女の奥深き處にたえず動いて

彼女のあらゆる熱き刹那の上に

冷やかなる手を差しのべてゐる

夜の如き手を差しのべてゐる

彼女は知つてゐる

何もかも知つてゐる

幸も 不幸も

悲しみも 喜びも

賑はひも 又淋しさも

されど彼女はその何れとも

たへて一つになることが出来ない

喜びと一つになることによつてそれを失ひ

恒なき心の夫「運命」の

愛を狂はすことを彼女は恐れてゐる

つゝしみ深く

何時も一人離れて

神に愛さる啞の如くに

ほゝえむでそれを見てゐる

喜びが彼女の上に来る時

彼女はそれに伴ふ黒き影を

毎も見逃すことがない

そして幸福と喜びとは

たゞ平安なる満足にとゞまる

悲しみの黒き夜が彼女の上に襲ひ来る時

彼女は晴れ渡る明日の朝の光りを

待ち望むことを忘れない

かくて悲しみと不幸とは

たゞ奥底のおのゝきにとゞまる

凡てのものゝ上に

彼女は兩つの顔を見る

そして凡ての表面おもてがその裏を伴へることを

彼女にかくすことが出来ない

かくて彼女が笑はんとする刹那に

その笑ひはかすかなるほゝ笑みに止まる

されど彼女は嘆かない

彼女は「人生」の神に

満足し、感謝して

静かに仕へてゐる

従順な巫女だ

永遠なる乙女にして

しかも貞淑なる「運命」の妻だ

運命そのものゝ如く嚴かに

智慧そのものゝ如く冷やかに

彼女はたゞ沈黙してゐる

何人も彼女の聲を聞かない

用心深く、時に温かく

されど熱からず

レオナルドの女はほゝ笑むでゐる

星のさゝやきのやうに

あらゆる心を秘密にたゞえて

底知れぬ静寂の中に

神秘の光輪にかこまれて

永久にたいほゝ笑んで居る

かすかに／＼ほゝ笑んでゐる

三つの夢

(對話)

ある寢室。兄弟A、B、Cの三人並んで寝てゐる。枕許に蠟燭が一本燈いてゐる。柱時計の音がカチカチはつきり聞こえる。

C。(眼を覺まして) お兄さん。

A。何だ、お前未だおきてゐたのかい。

C。いゝえ、今起きたのです。

A。お前は何かに脅かされたやうに聲を顫はせてゐるぢやないか。恐ろしい夢でも見たのか。

C。え、阿母様のお死になる夢を見たのです。あ、夢でよかったです。

A。阿母様のお死になる夢を？

C。さうです、兄さん。而も其お死になる譯が分らないのです。とにかく私の眼の前で不意に何かに頸をしめつけられるやうにして藻掻きながら死んでお了いになったのです。そのお苦し相な事と云つたら逆も見てはゐられないのです。あの綺麗な阿母様のお顔色が紫色になつて、白い額からは玉の汗が滲み、鼻からは血が流れ出てゐました。そして蒼褪めた唇の奥で齒がガツガツ鳴つてゐました。

A。俺もお前の齡頃にはよく阿母様の死を想像しておのゝいたものだ。そして俺はそれを思ふ時世の中が俄かに眞暗になつたやうに絶望し切つて了つたものだ。で、俺はさう云ふ想像をする事を自分に禁じた。しかし俺は夢の中ではそれを禁じる事が出来なかつたから、矢張りよくお前の今見たやうな夢を見てはひどくうなされたものだ。

C。ほんとに僕はどしやうかと思ひました。僕は何か恐ろしいものが其處にゐるやうな氣がして一生懸命に手を合はせて阿母様の命を助けて呉れと泣きながら頼みました。ほんとに僕は夢中で頭を地びたにこすりつけて頼みました。僕は世界も、自分の生も、何もかもそれで失はれて了ふやうな氣がしたのです。もう生きてゐても仕方がないやうな心細い氣になつたのです。僕は何んなものでも上げるからそれだけは許して呉れと頼みました。しかし阿母様はもう冷たくなつてお了いになりました。僕は氣違ひのやうになつて叫ぼうとして眼をさましたのです。

A。恐ろしかつたらう。お前の額には膏汗が出てゐる。だが誰でも母親に可愛がられて育つた者はさう云ふ夢を見る時代のあるものだ。お前の齡頃迄は未だ親と云ふものが何よりの頼りなのだからね。親があつて生も命もあるので、親の愛なしにはゐられないものだ。殊に自分を甘やかして抱いたりキスしたりして掌中の玉のやうにいつくしんで育て、呉れた母親に對しては何とも云へない強い特別な情愛を持つも

のだからね。その愛が強ければ強い程、それを失ふ時の怖ろしさ、悲しさを怖れるのは仕方がない。だから俺もお前の時分にはなるべく「阿母さんが死んだつて平氣だ、何、母親は母親、自分は自分だ」と思ふやうに努めたものだ。阿母様に冷淡になるやうに、心を引かれ過ぎないやうに努めたものだ。さうして其爲めに追いつく氣のついて来る阿母さんの欠點を態と誇張して感じやうとしたり、又ある時は阿母さんから遠のいてゐられる癖をつけやうとして仕度くもない遠い旅をしたりした事もあつたよ。

C。ではもう兄さんは阿母様のお死になる事は平氣？

A。平氣と云ふ譯でもないさ。それはもしさう云ふ事になれば今だつて屹度泣くだらうよ。生きてゐらつしやれば何のかんのと云つても矢張り死んでお了いになれば急に取り返へしのつかない大きな不幸の打撃を感じて淋しくなるには定まつてゐる。自分の今迄阿母様に對してした事をいろ／＼思い出して、あの時はあゝすればよか

つた。あんな事はしなければよかつた。何故あんなひどいことを云つてあの可哀相な年寄りを悲しませたらう。一寸我慢してやればよかつたのだ………杯といろ／＼後悔する事があるだらう。そしてその後悔は無益であるだけおよそつらいものだらう。又一方には阿母様の自分にして呉れた長い間のいろ／＼な丹精や、親切や、優しい笑顔や、骨の折れる看病や………そんな事を細かくあれやこれや思い出して阿母様を善く許り思つて来るだらう。深い感謝の念が今更に俺の胸の中に潮のやうにこみ上げて来るだらう。そして阿母様の欠點や、生前の過ちは跡方もなく消えて了つて、只佛のやうに美しく、優しい慈母の姿が眼の前にあり／＼と浮ぶだらう。死と云ふものはそれ程神聖なものなのだ。

C。それでも僕はあの阿母様をそんなものにするのはいやです。そんな事を思ふと餘り情けなくなります。悲しくなります。今生きてゐらつしやるあの阿母様程きれいな、善い、優しい阿母様はありません。もし死んでお了いになれば僕はもうあの阿

母様を見る事は出来ないのです。お聲を聞く事も出来ないのです。しかし生きてゐらつしやれば僕はかじりつく事も出来ます。キスする事も出来ます。お話しする事も出来ます。

A。甘へる事もな。は、それもい。それも美しい。しかし死ぬものは死ぬのだから仕方がない。阿母様ばかりではない。俺も、お前も、又此處にねてゐるお前のちい、兄さんも皆んな死んで了ふのだ。此家もつぶれて了ふし、此寢床も、庭の木も、草も、あの犬の太郎も、お隣りの花ちゃんも、吉ちゃんもみんな死んで了ふのだよ。

C。どうしても助かる道はないのでしやうか、兄さん。

A。お前の云ふやうな意味では助からない。恰度此の蠟燭の灯りのやうに一旦点けられた以上はそれはやがて消える事を意味してゐるのだ。終り迄灯りきつて消え果てるか、風に吹き消されて消えるか、誰かの手にもみ消されるか、何かとぶつかつて

消えるか、それとも水をかけられて消えるか、それは運命だから分らない。しかし何方にしろやがて消える事は同じだ。

C。あ、兄さん、僕はどうしたらいいのでしやう。

A。そんな意氣地のない弱い事を云ふもんじゃない。お前だつて男ぢやないか。燈はされた以上は出来る丈けよく燈り、出来る丈け大きく照らし、明るく輝けばいいのだ。それより仕方がないのだ。而もその事は灯りには悦びであるやうに、明るく輝けば輝く程生き甲斐を感じられるやうに作られてゐるのだ。俺達は太陽のやうに大きな強い明りになつて世界を照らさなければならぬ。さうすれば風も吹き消す事が出来ず、水も消す事が出来ない。

C。でも人間にそんなものになれるのでしやうか。あ、僕はいやだ、こわい、死ぬ事が。

A。誰だつて死ぬのは怖わいさ。いやさ。だから俺達は偉くなつて死ぬ事が怖わくな

いやうに、死んでも死なないやうにならなければならぬのだ。

C。でも阿母様はどうなるのでしやう。

A。お前はそれを心配しなくてもいい。阿母様は俺達よりもお偉いものだから。お前は自分が死ぬのと、阿母様が死ぬのと何方がこわい、何方がいやだ。

C。もしかすると阿母様のお死になる事の方がもつといやな気がするけれど、僕は自分が死ぬ事なんか考えた事はないから。只阿母様のお死になる事丈けが氣になるの。しかしそれは両方共いけない。何方もいやだ。

A。阿父様がお死になる事は考えないか。

C。だつて阿父様は何だか大丈夫な氣がするから。

A。(自分を指し)此兄さんが死んだつて平氣かね？

C。ちつとも平氣ぢやない。

A。はゝ、兄弟となるとそれは餘つ程違ふからね。けれどもお前の云ふ通り人は自分

の死ぬのも勿論怖ろしいけれど、自分の愛する者の死ぬ事を思ふ時にはその怖ろしさと、辛らさとはそれに優るとも劣らないものだよ。

C。けれども僕は兄さんのやうに大きくなると阿母様がお死になつてもさう今のやうに弱りはしないと思ふと氣丈夫になつてよ。

A。何でも段々齡を取ると變つて來るものだよ。

C。あゝ、ちい兄さんがうなされてゐます。

A。又屹度夢を見てゐるのだらう。

C。起こしましやうか。兄さん。

A。いや、起こさずにおいき。夢一つでも役に立つ人間には役に立つのだ。それを妨げてはいけない。

B。(顫えるやうな聲を出し體をゆすぶつて眼をあく)あゝ。

A。夢を見たね。

- B。あゝ、兄さん。今のは夢だったのか。
- C。ちい兄さん。どんな夢を見たの？
- B。どんな夢つて。あゝあゝ、いやだ〜。夢でよかつた。
- A。餘つ程苦しかつたね。お前の額にも冷汗が出てゐる。さあ、これでおふき。(ハンケチをやる)
- B。こんな夢を見たのは始めてだ。
- A。今夜は三人共同じやうな夢ばかり見たのだね。
- C。同じやうな夢とは。兄さん。
- A。俺にはBが見た夢は大抵分つてゐる。
- B。分つて？
- A。その心算だ。お前はあの人の夢を見たのだらう。
- B。でもそれは只の夢とは違ふのです。

- A。それは分つてゐる。さうでなければあんなにお前が魔される譯はない。
- B。兄さんはあの事件が駄目になつた夢だと思ふのでしやう。
- A。いゝや、お前には競争者はなし、向ふの家でもあんなに乗り氣なのだからさうは思はない。お前だつてその方ではすつかり安心してゐるぢやないか。お前はあの人が死ぬ夢か殺される夢でも見たのだらう。
- B。さうです。死んでゐる夢を見たのです。それも一通りの怖ろしさではないのです。
- A。どうしたのだ。お前と二人で山でも散歩してゐて鐵砲の外れ丸でも食つたのか。それとも森の中で木こりから過つて頭の上に斧でも落されたのか。
- B。いゝえ、そんなものではありません。私達二人は小舟に乗つて魚を釣り乍らそろそろ河を下つてゐたのです。
- C。さうして舟が引つくるかへつたの？
- B。黙つておゐで。私達は無上の幸福に酔つてゐました。私達は多くを語ることが出

来ずに殆んど無言で釣をしてゐました。しかし二人共魚の事なんか全く考えてはゐませんでした。私が永い事疾くに餌のなくなつてゐたのにやつと氣がついてあの人に笑はれたので、「あなたのは？」と私が云ふとあの人も矢張り何時の間にかなくなつてゐたので二人共眞赤になつて笑つた程でした。

A。それからどうした。

B。其處迄は實によかつたのです。處が………兄さん。あゝ、私はそれを云ふのさへ怖ろしい。

A。どうしたの。

B。あの人はやがて眞面目な顔をして私の方を向きました。そして「貴方にいゝものを見せて上げまじやうか。」と云ふのです。「えゝ」と私が答へると、「一寸あれを御覽なさいな。」と云ひながらあの人は舟べりにつかまつて水に顔をうつしました。私はふつとそれを覗きました。するとどうでしやう。鏡のやうな水の面に眞白な髪の毛

をしたお婆さんの顔が手に取るやうに映つてゐるではありませんか。私は氣絶し相な聲を上げて舟の上のあの人の方を見ました。其處には舟べりにつかまつてゐる骸骨がゐたのです。

C。おゝ、こわい。

A。氣味の悪い夢だね。俺はさう云ふ夢を見た事はないが、敬子が未だ俺の戀人であつた時分に矢張りあれの死を考へて苦しめられた事がある。餘りに其人の幸福を願ひ過ぎると其人の不幸を想ふものだ。吾々は愛しないものゝ不幸を想像しない。

B。だが一體今頃兄さんもCもどうして起きてゐらつしやるのです。

A。俺は一番先きに怖ろしい夢を見てうなされたのだ。それきり俺は眼を覺まして了つて眠らうとしても眠る事が出来ない。俺の頭はいろゝの事を考えるにつけてますます冴えて来るばかりだ。俺は何か書かうかと思つて此蠟燭を點けた。すると間もなくCが眼を覺ましたのだ。

B。お前は どうして眼をさましたのだ。

C。僕は阿母様のお死になる夢を見たのです。

B。俺も五六年前迄はさう云ふ夢を見る事があつたよ。

A。丁度俺が五六年前にお前のやうな心配に悩まされたやうに。

B。兄さんはどんな夢を御覧になつたのです。

A。俺か。さうさな。まあ、誰の見た夢が一番怖ろしかったか皆んな銘々自分の夢を一番怖ろしく感じてゐるのだから分らないが、どうも俺のは云はない方がよさ相だよ。年長者の年少者に對する義務とでも云ふか、俺はCに對してそれを云ふのを遠慮しやう。それを云はなくてさへもう好い加減Cはおびへてゐるのだからな、可哀相に小供を餘り脅かし過ぎるのはよくない。もうお前位いに確乎りしてゐれば俺も關はず云へるが、未だ何うにでもなる柔かい子供の頭を餘り臆病にするのは俺の責任にもなるからな。

B。とにかく兄さんは嫂さんや正ちやんの死ぬ夢を見たのですね。

A。さうだ。敬子は今度俺と一緒に故郷の家での姉さんの法事に來る事が出來ずに自家で留守番をする事になつた。あれは今又孕んでゐるもんでな。俺は今夜床に入る前にあれ等の事を當然考えなければならなく出來てゐる事のやうにふと考えた。今頃どうしてゐるかなと思つてな。俺の眼の前にあれ等の淋しい姿がちらついた。あれも亦毎もの子守唄を歌つて正坊を寝つかせ乍ら俺が今頃どうしてゐるかと思ひつつ床に入つてゐるだらうと思つた。俺は淋しくなつた。そしてあれ等の上に幸福を祈つてともかくも横になつたのだ。

B。兄さんも幸福を祈り過ぎたのですね。さうして程なく見たのですか。

A。俺は中々寢就かれなかつた。俺はあれ等の幸福を祈り過ぎた故か變にあれ等の上に何事か不幸が起つてゐるやうな氣がして、不安になり出したもんでな。仕方なしに俺は一旦起きて明るい室に行つて葡萄酒を二杯飲んだ。それで少し氣分が變つて

又寢床へ戻つて來ると間もなく俺はうと／＼とし出した。と、思ふと五分もたゝない中に俺はもう夢を見てゐたのだ……いや、何だか此處迄云ふと後が俺の口を誘ふが、俺は云ふまい。

B。(低い聲で) Cは寢就いたやうですよ。

A。幽かに寢息が聞こえるね。幸に晝間の疲れが餘程眠むい事は眠むかつたと見える。小供の心にふれる事は恐ろしい事だ。それはよく磨いた清い珠のやうなものだからな。わきから見てゐる分にはいゝが、手に取ると瑾をつけはしないかと思つて不安になる。それに小供は感じの強いものだ。伸びる前にいじらせてはならない。

B。かと云つて餘り大事にし過ぎて事實に觸れられないやうになつても男は困りますからね。温室の植木のやうに外へ出ると直ぐ萎れて了ふやうでは仕方がありませんからね。知るものはどうしても知らなくては濟まないのですから。

A。と云ふよりも知つた方がいいのだ。しかしそれには一々時がある。大きく生長し

た木を日蔭げに移すとも、北風に洒らすともいい。併し苗の中にそれをするのは少し冒険過ぎる。それは其木を枯らさない迄も病氣にして了ふだらう。如何なる處にも夜は來る。小供には小供の心配がある。怖れがある。それで充分だ。それ以上の暗闇を來らせると日光を充分に吸収する事が出來なくなつて、其人間は人生の總體を見る事が出來る前に一部に偏した病人になつて了ふ。人生を病的にしか見られないやうでは一生の大不幸だからな。戦ふ力のある者を戦場へ出すのはいい。しかし未だその力のない小供を其處へ出すことは只殺しにやるやうなものだ。俺は凡ての人間に健全を望む。運命の不順になる事をのぞまない。それは危ない事だ。恐ろしい事だ。

B。しかしCも兄さん達の前では全く何も知らない小供のやうに甘へてゐますが、眞實もう頭はそれ程小供でもないのですからね。

A。それは俺も知つてゐる。それで俺は先刻お前が眼を覺ます前にCに死の話の少しして聞かせた。吾々は皆死ぬ者だと云ふ事を。それ位はあれももう知つてゐていい

事でもあり、又既に知つてゐる事なのだから。しかし氣味悪がらせる事は止した。それは餘計なことだからな。

B。一體兄さんはどんな夢を御覧になつたのです。私にはそれを話して下すつてもいいでしやう。

A。俺のも始めにはよかつたのだ。毎もの通り俺は自家で家族と夕飯を済ました後で爐のわきに集まつてゐた。俺は膝の上に正坊を抱いてゐると敬子は天井から吊したざるの中に愛子を入れて、それを揺すつてゐた。正坊は俺の願髻を引つ張る。愛子は母親の頬つぺたを小さな手でたゞいたり、唇を引つ張つたりしてゐる。静かな氣持のいゝ晩で、窓から月がさし込んでゐた。やがて愛子は空乳首をチュー／＼吸い乍らすやく／＼寝入つて了ふ。俺と敬子とはその天使のやうな可愛い、寝顔をのぞき込んで互に眼を見交はしてほ／＼笑んだ。その時に俺は思つたよ。「之が所謂幸福と云ふものかしら。いや、少くも俺等がもし何かの不運で境遇が變つたならば今のかう

云ふ平和な時の様を想い浮べてあの頃は幸福だつたなと思ふに違ひない。」とな。實際俺達の眼は互にこんな風にも云ひ合つてゐるかのやうには／＼笑んでゐた。「貴方幸福ではありませんか。」「さうだね。」と云ふ風にな。

B。始めがよ過ぎるとどうも終りがいけませんね。

A。ふと俺は窓の處から誰か俺達を外へおびき寄せやうと呼んでゐる聲を聞いたやうな氣がしたのだ。丁度俺は食後の腹ごなしに其處らを一歩きして來やうと思つてゐた處だつたので、月もよし、俺達は愛子を乳母に預けて正坊の手を兩方から曳き乍ら表へ散歩に出たのだ。俺達は近所の公園へ行つた。其處では音楽をやつてゐた。それを立つて聞いてゐる中に足が少し草臥れたのと、正坊が何かほしいと云い出したので、俺達はある茶店に腰をかけて休むことにしたのだ。其處では美しい娘達が賑かに踊つてゐた。俺は落ちつかなかつた。ふと、俺は敬子の顔の色が變に變つてゐるのに氣がついた。それは何か怖ろしいものを見たやうに、そしてそれを見るの

をよけてゐるやうであつた。で、俺は後ろを振り返へつた。と、少し離れた處に一人の男が娘を相手にふざけてゐるのが見へた。其男は俺が其方を向くと同時に後ろを向いて了つたが、其後ろ姿を見ると俺はどうも見た事のあるやうな男だと思つた。そして考えてゐる中にそれは以前に敬子を執拗く戀して俺に横取りされた奴だと思へて來たのだ。

B。あの男はもう死んだと云ふ話ではありませんか。

A。さうだ。それだから猶ほ夢の中ではいけないのだ。處が其奴が一寸此方を向いた顔を見ると又違つた別の男だと云ふ事が分つたのだ。而も其奴の聲を聞くと先刻俺達を窓の所から呼んだ奴は其奴だつたと云ふ事も疑へなくなつた。「何と云ふ氣味の悪い、いやな顔でしやう。」と敬子が云つた。と、俺は水をかけられたやうにぞつと總身が戦立つやうな氣がした。何故と云ふに俺は既う其時其奴が死神ではないかと云ふ氣が自分にしてゐたからだ。で、俺達はそこへ其店を去つて歸り路に就い

たのだ。處が俺達の後に其男が影のやうに蹤いて來る足音がはつきり聞こえるのだ。それは段々近くなつて來る。火葬場の煙りのやうな臭い息が感じられる。俺達は無言の儘せつせと急いだ。併し足許はさう云ふ時に毎でもさうであるやうに齒痒い程進まないのだ。「阿父様。阿父様。何か來てよ。後ろから。あゝ、怖わい。」正坊はとうとうかうおびえるやうに云い出して俺に嚙りついた。敬子は敬子で、「貴方、どうしましやう。」と口の中で繰り返へし乍ら俺の手を握りしめてゐる。其手はわなわな顫へて氷のやうに冷たかつた。俺だつて後ろを振り向く事も出來ない程怖わいのだ。俺はもう壽命が縮まるやうな氣がして、いつそ其奴と闘つてやらうかとも思つたけれど、到底そんな力は俺には無くなつてゐる。それでもやつとの事で俺は夢中で自家の門迄辿り着いたのだ。俺は氣違ひのやうになつて扉を叩いた。と、それは手答へのない幕のやうにぱた／＼と落ちて其處へは黒い喪服を着た乳母が泣き乍ら立つてゐるのだ。驚いて前を見ると自家と思つた處にはもう自家はなくなつてゐ

て其處はだゞつ廣い墓場なのだ。そしてその暗闇の中に四つの白い石塔が何時の間にか立つてゐるのだ。中央に大きいのが二つ。其兩わきに小さいのが二つ。それを見たと敬子はいきなり其處へ斃れて了つた。そして正坊は冷たくなつて俺の胸にかじりついて死んでゐた。

B。兄さんはよくさう云ふ死神の夢を見るのですね。

A。その夢を見て俺は、「此俺も氣違ひになれるのだな。」と云ふ事が分つた程、其時俺は氣違ひの心理状態になつてゐた。

此時強き風雨戸をガタ／＼云はせたのでC再び眼をさます。

C。おや、兄さん達は未だおきてゐたの？

B。あゝ。

C。未だこわいお話をしてゐるの？

A。もうそんな話はしてゐない。

C。僕は大きい兄さんの話は聞かなかつた。

A。聞かないでもよかつた。つまり俺達は皆んなそれ／＼の境涯で似たやうな夢を見たのだ。皆んな自分のとり分け愛するものゝ死ぬ恐怖の夢に襲はれたのだ。Cは阿母さんの死ぬ夢に、Bは戀人の死ぬ夢に、そして俺は妻子の死ぬ夢に脅かされたのだ。

C。阿母様はどんな夢を御覽になるでしやう。

A。阿母様かい？阿母様は此處にゐる俺達皆んなや、その又子孫や、戀人や、妻の死ぬ夢でも御覽になるだらう。

C。阿父様はどんな夢を御覽になるのでしやう。

A。阿父様かい？阿父様は恐らく全世界の凡の人間の死ぬ夢でも御覽になるだらう。

B。人間が大きくなればなる程恐怖も大きく深くなるのですね。心配と云つてもいゝでしやうが。

A。さうだ。愛が大きいからだ。大國の王は一家の主人よりも心配が大きいやうに、愛の範圍が廣いから従つて心配や恐れ、の範圍も廣くなるのだ。俺達は未だ自分一個の運命に直接かゝはつた者の死より外はそれ程氣にしてはゐない。あれが死ぬ？それは可哀相だな。これも死ぬ？それは可哀相だな。とは思ふ。併しそれは其以上に深入りはしない。又深入りする事を吾々は恐れる。俺達は未だ自分一個の死の問題でさへ持て餘してゐるのだからさう他人の死の問題に深入りする力はないのだ。又力がないから事實それをそれ程心配もせずにあるのだ。人間は力丈けの事しかしないものだからね。

B。しかし私達は自分の愛するものゝ死を自分の死と同様に、或はそれ以上にと云い度い位いに恐れてゐるではありませんか。

A。さうだ。そしてそれは吾々の復活の曙光だ。俺はよく自分の妻子と楽しくしてゐる時に、又その平和な寝顔や、餘念なく働いたり、無邪氣に遊んだりしてゐる様を

見る時に、不意にそれ等の死を想ふ事がある。俺達が安泰にして平和な幸福に浸つてゐればある時程俺はそれを破壊する死の悲惨を想はせられ易い。此奴も死ぬのだな、彼奴もやがて死ぬのかなと思ふ。其感じが少し廣まる時は女中や、下男や、往來で、會ふ他所の人間に對しても矢張り同じやうに感じる。これもあれも、どれも、これも皆んな死んで了ふのだなと思ふ。そしてそんな時俺は何とも云へない……無常と云ふか、不審さ、淋しさ、果敢なさ、慘めさ、恐ろしさ、いじらしさ……と云つたやうなものを感じる。あのくりくりと肥つた、漸く片言交りで喋舌るやうになつた可愛盛りの小供の餘りのあどけなさを見るにつけ俺は一層其いじらしさを感じることがある。又あの生の濃潤とした勢いに漲つてゐる血氣盛りの青年や、何を見ても可笑しく、笑い度くなるやうな綺麗な娘を見るにつけて俺は殊更その無常さを感じることがある。勿論それが一番強く、切實に來るのは何と云つても自分の妻子に對してだ。そして俺は堪らなく思ふ時がある。それはひどい、餘り残酷だ、それ丈けは

許して貰ふ事は出来ないだらうか……かう何かに請んでやり度くなるやうな時さへある。實際……自分が身命にかけて愛する者が、而も可憐な、此世には美し過ぎる位に見へるものが、そして又實際人の心を美しくするものが、虫けら同然にむざむざと朽ち果て、死んで了ふと云ふ事。嘗て存在した事もなかつたもの、やうに他愛なく無一物に歸して了ふと云ふ事。僅か半年か一年位自分の家に備つてゐた召婢が暇を取つて下る時でさへ、いゝ氣持はしないものだに、犬や猫は勿論、家や、道具のやうな死物にさへ慣れれば情愛の移るものであるのに、況して永い／＼年月、互に愛の血や肉をからませ、助け合い、持ち合ひつゝ同じ一つの運命に生きて來た同士、朝から晩迄仲よく顔を合はせ、語り合つて來た同士、それがもう二度と會へない處へ消えて行つて了ふと云ふ事。な、永久に「二度と會へない」處へだ。それも一通りならぬ苦痛に擲り殺されて……それを只言葉として／＼はなく、實際の場合に當て嵌めてあり／＼と想像して御覽。

B。眞個くそれを思ふと堪りません。心から淋しくなる以上に絶望して了います。實に驚くべき偽のやうな事です。それを假りにあの人の場合に當てはめて考えて見ると——そんなことをするのは實にいやですが——僕は氣が狂い相になります。

A。もし吾々に死の智識と云ふものが全るでなかつたならば、吾々の前にその愛人の惨めな死骸や、骸骨や、土くれを持つて來てそれを未來の其人だと云はれやうとも吾々はそれを決して信じはしないだらう。

B。信じないどころか、その人を侮辱されたやうに思つて怒るでしやう。

A。しかしそれが避けられない事實だと云ふ事を吾々が知つた時に吾々は何うしたらいいだらう。吾々はそれ等の愛するもの、心に何か死に打ち克つもの、死によつてくすされない、死よりも強いもの、生死以上の不滅なあるものを植えつけてやり度い慾望に充たされはしないだらうか。如何なる有力な、強い闖入者が入り來らうともそれに侵されもせず、破られもしない眞の牢強な幸福を齎らしてやり度い願望に

充たされはしないだらうか。

B。さう云ふ氣はします。しかし第一さう思ふ事が既に無常な感じがして寂しいのです。そしてその寂しさが私等の純粹な悦びの感じを傷けます。私は實は今私等が感じてゐる淨い明るい、幸福の感じを靜かな、ゆるがない聖火のやうにそつとしておき度いのです。それに冷やかな夜の風をあて度くないのです。

A。お前のその氣持は俺にはよく分る。

B。そして私はあの人の中に永遠な美を感じてゐます。

A。それにも拘はらずお前は矢張りあの人の死の恐怖に襲はれるのだ。そしてその恐怖が襲つて來る時にお前等の明るい幸福は風前の燈火のやうに危うくされるのだ。恰度俺が先刻見た夢の初めの幸福が直ぐ破られて了つたやうに。

B。勿論私はあの人の肉體の中に永遠を認めてはゐません。私はそれをも認め度いのですけれど、それは私の知識が許しません。たゞ私はあの人の全體の中に何處と云

ふことなしにある永遠で神聖な靈が宿つてゐる事を認めてゐるのです。

A。それは間違つた見方ではない。しかしそれでも猶ほお前は寂しいのだ。お前はそれが畢竟お前一人の主觀的な感じに過ぎない事を知つてゐるから。お前が如何にあの人の中に永遠な美を感じやうとも、又お前があの人の事を思ふ時にお前の中に如何に清淨なゆるがない聖火が美しく輝かうとも、それは要するにお前丈けの事であつて、あの人自身の生命には何の關はりもない事をお前は知つてゐるからだ。假りに今あの人が死んだとしてもあの人の感じ、あの人の美、お前があの人に對して感じた一切の記念は、お前に生命の續く限りお前の中に生きるだらう。常に甦る神聖な偶像として永久にお前の中に寂しく輝くだらう。そしてお前は又その内の刺戟から善い仕事を産み出すだらう。お前が感じたあの人の美は人々の心に傳はるだらう。しかしそれは凡てそれに止まつて更にあの人自身の生命を何うする事も出來ない事をお前は知つてゐるのだ。そしてその神聖な偶像の藏であるお前自身も早晚後を追

つて「無」の世界に行くのだと云ふことも。或はそれが逆まになるかも知れない。

B。逆まに。私は今迄時偶あの人の死をふと念頭に浮べる時に私はむしろそれが逆まになることを望みました。あの人の死に遭遇するよりはいつそ自分が先きに死んだ方がいゝと思ひました。處が昨日私は兄さんを迎えに停車場に行く途中で、後ろから私を嚇かし乍ら追ひ越して行く馬車に逢つたのです。見るとそれは一臺の棺を載せる空の馬車でしたその馬車はもういゝ加減古くなつて、棺を載せる中の板が古光りに光つてゐました。其板には棺を中に押し込む時に滑らせる爲めの小さな車が八つ位附いてゐました。もう何人其馬車は死骸を載せて運んだか知れないやうに見へました。私は一體あの馬車が嫌ひなのですが、昨日私はそれを見てゐる中にその硝子でかこつた車の中に棺に入つてズル／＼押し入れられる時の事を想像したのです私の眼に白い經帷子を着て、骨張ばつた蒼白い手を胸の上に組み合はせ、半分口を開いて仰向けに寝てゐる自分の姿があり／＼と浮びました。私は頭をむしやぶり振

つて體を躍るやうに揺すぶりました。私は思はず聲を放つて地びたを強く踏みつけて歩きました。併し私は自分のその忌はしい想像をちきには拂ひ退ける事が出来ずに、停車場に着いて程なく兄さんの元氣な顔を見る迄はすっかり滅入り切つてゐました。つく／＼死ぬのがいやになりました。

A。吾々は他人の死に就いては經驗する事が出来る。俺は今迄にもう幾度もそれを経験した。その場合にそれは毎も前から見る時には如何にも怖ろしいものだが、しかし一旦通り過ぎて後ろから見る時にはそれは實に静かな、佛のやうに柔和で、神聖な感じを與へるものだ——死者は實際佛の感じのするものだ——それは人間の心を美しくし、運命の前に謙遜にし、嚴肅にする。そして人の心の中に愛と慈悲の涙を呼び起こすものだ。何人も死の面前で人を憎む事は出来ない。それ程その力は偉大だ。人は死を思ふ時に絶對になる。死が常に目前にちらつく人間は幸福だ。其人間は詰らない事に囚はれずにあるだらうから。

B。しかし私は未だ滅多にその歡念や恐怖に觸れる時のない事を今の自分として幸だと思つてゐます。私は人間は死の事ばかり考えるやうに作られてゐないと思ひます。孔子は「未だ生を知らず、いづくんぞよく死を知らん」と云つてゐますね。私は只善く生き度いと思つてゐます。常に出来るだけ充實した生を送り度いと思つてゐます。さうして行けば自然に何時か死に卒業する事も出来る氣がしてゐます。私は生の中に死以上のものが獲られると思つてゐます。私は先づ生きる事に努めず死の意義を解し、それに打ち克たうとするのは戦はずに平和を望むやうなものだと思つてゐます。眞の平和は偉大な戦の後に自然に來るものだと思ひます。

A。お待ち。お待ち。吾々は生以外の時を持たない。だから生の中を除いて吾々は死以上のものを獲る時のない事は勿論だ。事實吾々は生の中に於て比較的善い瞬間を持つ事は出来る。吾々の心が愛に輝く時、正義に勇む時、感謝と敬虔の念に涙ぐまるゝ時、美の恍惚に打たれる時………それ等の嚴肅な瞬間に吾々の身は現實の

中にあるけれど、吾々の心は現實を超越してゐる。そして其時に「無限」は吾々に窓を開ける。かゝる心境を常に持してゐられる人間は幸福だ。其人間は宇宙の法則の中に生きてゐるから。しかしその幸福の光りの強さが問題だ。吾々はその最上な瞬間にゐる時と雖も猶ほ死の黑影には顔を顰めるのだ。吾々のその光りはその黑影を明るくする程の光力を持つてゐない。そして一寸開いた「無限」の窓は一刹那の後に直ぐ又閉じて、後には死の恐怖が依然とした事實として吾々に附き纏ふのだ。吾々が善く生きやうとすればする程、吾々の生に對する執着が強くなればなる程、吾々が生を愛すれば愛する程、その避くべからざる未知の事實は吾々の前にのさばり出て來るのだ。吾々は時にはそれを見て見ない振をして行かうとする。しかし常にさうして胡魔化してゐる事は出来ない。吾々が早晚眞にそれによつかつてそれに打ち克つて了はない限り、それは俺の夢に出て來た死神のやうに何處迄も吾々の後を跟けて來て、しつこく吾々を惱ますのだ。現にお前や、俺や、Cが惱まされてゐ

るやうに。

B。此世にありとあらゆる大抵なものは皆死によつて滅ぼされて了ふのですね。

A。さうだ。吾々の肉眼に映するもの、耳に聞き得るもの、手にふれ得るもの、凡て色々の五官に訴へる處のものは、如何に美しくとも、如何に快くとも、皆滅びるのだ。吾々はそんなものゝ上に安心して立つてゐる事は出来ない。俺達が先刻夢で見た幸福な感じ、あれも一種の幸福には違ひないのだらう。ともかく其瞬間に俺達の心は善い意味での地上的な幸福と穢れのない美しさに浸つてゐたのだ。ある種の人々はそれを以て既に満足するだらう。其人はそれ以上の幸福のある事を知らないから。しかし眞の安心立命を希ふものはそんな幻影に頼るやうな事はしない。そして遂に眞に頼るべきものに到達して、それに頼る迄は平安と満足とを得ない。穢れてゐない、清いもの、さう云ふものは地上にも珍らしくはない。小供の心杯はその例だ。しかし眞の安心立命を獲やうと欲するならば清い丈けではいけない。吾々

は生死の根源に探り入つて其處の無限な泉を掬み取らなければならぬ。有限な自己の中に無限を體得しなければいけない。無限との眞の交渉を結んで、それと合體しないものは當然凡て皆滅びるのだ。

B。しかしそれも自分丈けでは仕方ありませんからね。

A。しかし自ら死に打ち克つてゐないものがどうして人に死以上の福音を傳へる事が出来るだらう。努力は一つだ。吾々は高くなれば高くなる程多くの人の事を思ひ、多くの人の事を思へば思ふ程自ら高くならなければならぬ事を思ふ。「我れ爾等の爲めにわれ自らを潔くす。」と基督は云つてゐる。その基督は全人類に對して、恰度吾々が自分の親や、戀人や、妻子に對して感じるやうな救濟欲を常に切實に感じてゐたのだ。それも最も根本的な意味で感じてゐたのだ。

B。私達は何と云ふ小さい者でしやう。惨めな者でしやう。そのくせ呑氣なものでしやう。

A。其くせにではない。其の爲にだ。けれども眞生命を求める熱情丈けでは誰にも負け度くないではないか。吾々がかく死を怖れるのは無意味ではないのだ。人々は何か善い仕事をするやうに作られてゐる。それを成し遂げない中に死を怖れないやうでは人類を愛する自然が困るのだ。自然は人類を賢くして悟らせる爲めに死の問題を凡ての人間の前に提出してゐる。誰もその消息を経験者の口から聞いた者がない。そしてそれは永久に知られない秘密として、謎として、人々の前を影のやうに彷徨つてゐる。それ故にそれは無氣味で、恐ろしい。しかし吾々はそれを怖れることによつて少しづつ生自身の意義を解いて行くのだ。素よりそれに打ち克つ事は容易ではない。しかしそれが容易な業であつては吾々の生き甲斐もないと云ふものだ。死をして出來得る丈け高價なものであらしめなければならぬ。——基督や、釋迦や、ソクラテスの死のやうに。——それは生を高價なものであらしめたことになるからお互に高價な生を送らう。如何に苦しくらうとも。そしてお互に高價な死を迎えや

う。

B。ほんとに私は先づ私自身を何うにかしなればなりません。戀人を愛するにつけその死を怖れるにつけ、そしてどうかあの人に死以上の——兄さんの所謂眞生命を獲させて上げたいと願ふにつけて私は自分の力のない事を感じます。本當にあの人を只殺して了ふ事は忍びない事です。どうかして少くもあの人一人は救へるやうになり度いと思ひます。私は今それを私の必生の仕事のやうに感じる事が出來ます。

A。何しろ吾々の内に愛を無限に大きくしなければいけない。智慧の光りを彌が上に明るくして、如何なる迷いの黒雲が蔽いに來やうともそれを破らなければいけない。常に眞理を愛し、それを求めて、宇宙の法則に従つて生きるやうに努めなければいけない。眞に宇宙の法則を解してそれに叶ふやうに生きてゐれば自然に義と正とを愛するやうにもなり、運命を畏れるやうにもなる。其處に自由があり、幸福がある氣がする。俺としてさう云ふのは未だ少し怖ろしいが、とにかくさうなるやうに努

めるより仕方がない事は事實だ。

B。私はどんな寂しさとも闘つて生きて行きます。兄さん、私には未だ實に解らない事ばかりです。私の前途は未だ餘りに遙かで、やゝもすれば雲にかくれて了います。しかし私は勇氣を落さずに、飽く迄も人生を愛して、石にかぶりついても求めて行く意志だけは持つてゐる心算です。仕舞にはありつけるでしやう。

A。お互に助け合つて行かうよ。睦しく手を取つてな。楽しみは其中にあるのだ。

B。一體どうして今夜私達は皆んなこんな夢を見たのでしやう。

A。俺達は姉さんの一年目の法會で此處に集つた。そして今夜俺達は皆んな姉さんの事を話し、いろいろの事を思い出し、そしてその死の記憶に今更に打たれた。死が吾々の心に黒い影を投げた。大方その故だらう。

B。あゝ、灯りがもう消えかゝつてゐます。

A。恰度いゝ。もう朝迄は間もないだらう。俺は少し疲れた。明日の一日を無駄にし

てはならない。では又明日の晩にでも話さう。

B。さうしましやう。私も少しぼんやりして來ました。

A。Bは又すやくよく眠つてゐる。

B。では兄さん、お休みなさい。

A。お前もお休み。

蠟燭の灯り消ゆ

國粹と云ふことに就いて

(タゴール氏の來朝に際して)

一つ大きな河流が入つて來る時には一見した處その水は濁つて居る。そしてその表面は油ぎつていろ／＼の芥や、不潔なものや、屑が澤山其上を漂つてゐる。河が大きければ大きい程それは小川のやうな清流ではありにくい。

しかしそれでその河の水が市民にとつて有害無益なるものであると云つて捨てることは出来ない。かゝる見方は餘りに表面的である。それを應用し生かす力さへあるものならば濁つた河流から無量の清水をしぼりとることも出來、その豊富な水量を應用していろいろの大きなエネルギーを得ることも出来る。

その河に接近するものは或る時はその氾濫に害されることがあらう。或る時はその

悪臭に惱まされることもあらう。しかしかゝるものさへもし普通の眼をもつてゐたならばその河流によつて多くの美景に接して樂むことが出来る。其上を傳つて來る涼しい風に浴する事も出来る。まして多くの有要なものがその河の水量から得たエネルギーによつて産み出され、その上を通ふ船舶によつて持ち運ばれ、輸出されるのである。かくてその河流は結局それを持つ市民にとつて大いに有益なものとなるのである。

外來の文明も同じである。それはいろいろのものを運んで來る。それを受け入れる國民にとつて眞に利益あるいゝものばかりを輸入する譯には行かない。いゝものと一緒に随分芥も屑も持つてくる。そしてかゝるものは表面に浮んでゐるものであるからすぐ人の眼に付き安い。しかしそれを以てその輸入物の全部を排斥してはならない。それは事實心ある處には心ある營養を持ち來し、清水を求めるところには清水を供給してゐるのである。もしそれに害される方ばかりであるならば、英國が支那に侵略の目的で阿片を輸入したことの如き特別な場合でない限り、それは入り來る文明の罪で

はなくしてそれを受け入れる者の方の無能の罪である。

交通は自然の意志である。個人にしる、國家にしる、交通なき者には進歩がなく、獨自な者は無意義に亡びる。常に最も高尚な意義に於ける外界(人類とか、眞理とか、自然とか云ふ)と深い交通を持つ個人は榮えるやうに、世界も亦各部分が互に善きものを交換することによつて發展するのである。而してそれは又人類の必要であり、要求である。其要求があることは悪いことではない。只彼等の多くが其無智の爲めに何を最も要求すべきかを知らないのである。

しかし其處にもある程度の低い調和はある。何故なら高級な要求を持つ者の相應な犠牲になつて働く者がなければ高級な物は入り來らないからである。印刷業とか、薬屋とか、ある範圍の工業とか、それ等のものに與はる者が皆無であつたならば、吾々は多くの有益な智識を得ることに非常な不便を感じることは明かである。吾々漁夫の利を占めてゐる者、又占めなければならぬ者が、その仕事の上に於てのみならず、

日常生活に於てかゝる物質文明を重寶してゐることは少くない。吾々はそれを尊びはしない。しかし其便利を認める。そして其便利をいゝと思ふ。かゝる便利あるが爲めに吾々は重要な仕事に多くの時間を費すことが出来るからである。

何故人々はそんなに廣く交通したがるか。狭い範圍で只需要なる物丈に止めておけばいゝではないか、と人は云ふかも知れない。しかしそれは間違つてゐる。人々は善いものを好むのである。善いと思ふものを好み取らうとするのである。更により善いものが出ると、又それを好んで前のを捨てる。しかし人はそれを彼等の單純な巧利欲から出るものと蔑む^{さげす}ではならない。それが人間の長所なのである。よし智慧が淺い爲めにその選び方を誤る者が多からうとも、より善きものを好むと云ふ心は人類が原始時代から今日迄進化した事實を來たし、又未來の進歩の可能を意味してゐるのである。何故ならより善きものを愛する心は即ちより善くならうと云ふ人間の本性を意味してゐるからである。人類に此傾向がなかつたならば人類は今猶ほ石器時代と大差のないもの

であつたかも知れない。そして智慧のある者は最も深く其本性を活かしたのである。人々はその智慧の高低によつて、それ相應により善きものを愛する本性に世界中區別はなく、又其心がなければ進歩はないのである。善いと思ふものは何んなに遠い處のものでも矢張り善いと思ふのであるから仕方がない。自分の善いと思ふものが遠い外國にあれば、自分の國にある手近のものよりも其方を愛する。かくてそれを求め、それに倣つて、互に自分の手近のものを改善し磨き合つて行く事によつて人々は進歩するのである。彼等を導く者は其傾向を殺してはならない。それを善用して活かしてやらなければならぬのである。

現に吾々は善いものを愛するが故に日本のものよりは勝れてゐると思へる西洋のいゝものを愛するのである。それは最早吾々には善いからと云ふ理窟杯を感じさせない程吾々にはピッタリ来る。それを吾々が愛することは最も自然に思へ、又かゝるものを心底から愛する事が出来るのを幸福に思ひ、出来ない者を不幸に思ふ。事實吾々は

それ等の藝術や思想にふれて日本のそれ等のものにふれるよりも百倍も同感を感じ、善いと感じ、それが正しいと感じるのだから仕方がない。そしてかゝるものには實にファミリアルを感じる。外國とか、別人種とかのものと言ふ氣は別にしない。よししてもそれは些しもファミリアルな感じを妨げはしない。只人間の昵近を感じる。そして眞に善いものは絶對的であつて、空間や時間の境界を絶してゐることを知り、そして眞生命を求めざる者の求めざる處、生き方は世界を通じて同じだと云ふことを知る。眞理は何處に於ても一つであり、それを求めるのが人類の奥底の意志であることを知る。かくて彼等と共に同じ眞生命を求めざる吾々は彼等にふれて父兄に對する以上の親しさ、頼もしさを感じ、物の見方を教はり、其鳴を感じる。その感情は人間の本性であつて境はない。嘘だと思ふものがあるならば日本で眞に彼等と比敵する世界的天才を出して見るがよい。彼の感情は西洋と東洋を問はず、世界のあらゆる心ある人々によつて理解され、或は同感され、敬愛されるであらう。又吾々同國人として夫を敬愛

することは云ふ迄もない。

個人の中には「時」と共に流れてゐる生命がある。それは常に前進を欲して止む事がない。その欲望と、活動とが止む時、其個人は死んだのである。同じやうにその大きな全集團である人類にも「生命」を意味する潮流と云ふものがある。その潮流は勢ひであつて防ぐことは出来ない。そしてそれは一個人の潮流に比して遙に力強く、抵抗し難いものである。しかしそれは人類の要求である。人類は個人のやうに生命のある限りたえず前進しなければならぬ。その前進の要求が人類にある事は、事である。思想家はそれを善くしやうとして、堰を作つたり、池に入れやうとするやうな無理をしてはならない。積極的にその傾向を正し、それを活かしてやる者でなければならぬ。流れに乗つた舟はどうしても流れるのである。それを食ひ止めることは出来ないことであり、又食ひ止める事は自然の意志に反してゐる。只その先登に立つ人間はその急所々に當つて舟の舳に立ち、竿を以て崖を突き、巖を突いて其舟の方

向を正しい方へ」と轉じてやるべきである。そしてその舟の運命を安全に海に迄導いてやるのが思想家や、藝術家の使命である。

「古に歸れ」と云ふやうなやり方は自然の意志に悖つたやり方であると思ふ。それよりも「善き未來に進め」と云ふべきである。元へ戻ることは出来ないことであり、又個人に於ても人類に於ても活動は生命であるからである。只その活動を善に向けるやうに力を注がなくてはいけない。その勢ひを拒んで力をいじけさせるのが思想家の役目ではない。進むものは進む丈け進まさせるのがいゝのである。其場合に必要なものは岡の上から「危ない」と云つて舟を止めさせ、乗客を上陸させるお婆さんではない。乗客は海に出たがつてゐるのである。否、必要なものは其櫓を漕ぎ、竿を押すものと共に、舵を取り、舳に立つてその進路を海へ」と安全に取らせる確かで、賢明な見張り番なのである。

再び元に戻つて、何の國も鎖國主義から脱して外國と廣く交通する時にのみ長足の

進歩をする。ロシアはペートル大帝が外國の文明を入れてから眼に見えて進歩をした。そしてロシアの國粹と独自の文明とはその後世界的なものとなつた。日本が歴史に於て長足な進歩をしてゐる時は支那の文明を入れ、佛教を入れた時であつた。その時に多くの日本人は國粹の滅びることを氣遣つてそれを嘆き、それに反對した。しかしそれによつて日本の國粹は滅びずにむしろ刺激されて多少の生長をさへした。維新以後の日本の進歩は云ふまでもない。或る人々は其處にたゞ表面上の物質的歐化のみを認めるであらう。しかし物質上のことは總てさうである如く其影響も直ぐ容易に眼立つけれども、精神上の深い影響はそれが自家薬籠のものとなつて頭角を現はす迄には常に相當の年月を要する。併し既にある處にはもう芽は出てゐる許りでなく、何時の間にか生長してゐるのである。そしてそれこそは日本が眞に世界的なものとなる代表的な木である。

日本は眼を覺ました。今日の日本が吸収した營養分は過去の日本が吸収したものよ

りももう少し根本的で、有機的なものである。過去の日本は未だそれだけの人物を産み出す丈けに熟してゐなかつたからである。丁度エリザベス朝の覺醒時代に沙翁やベーンがイギリスに産れたやうに、又ルネサンスのイタリアにあれ程の怖ろしい天才が輩出したやうに、ある國の代表的天才を産み得るにはそれ丈けの氣運が迫つて國民の要求が根本から熟して來てゐることを要する。そして今日日本は其時に遭遇しつゝあるのである。

今日の日本の要求を今迄の日本の要求と同一視しては間違ふ。それは最早世界に向つて眼を開け、國內よりは世界の立ち場に立つて物を見やうとしてゐる。それは根本から啓發されて來てゐる。従つて今迄の感化の受け方とは受け方が違つてゐる。その要求は何も世界を物質的に侵略しやうと云ふのではない。(さう云ふ侵略主義は昔の野蠻時代からあつた。)併し今の日本の要求の内には昔にはなかつたそれ以外の要求も眼覺めてゐる。よし多くの淺薄な現實家が未だそれを妄想として嘲らうとも既に覺めた

る眞の人類的要求を持つ少數者が現はれてゐると云ふ事實はその事を證明してゐる。日本の中の覺めたる者は皆既に無意味な國粹に超越してゐる。そして其覺醒には外來のいゝ感化が大部分與つて力あるのである。

「しかしかく歐化して日本人が皆その國粹を顧みなくなつたならばどうして日本はそのオリヂナリティーを世界に發揮することが出来るか。」ある者はかう云ふかも知れない。

愚かな心配である。もし日本が全く天才を産み得ない、先天的に模倣者としてのみ生れた國であるならばかゝる心配も當を得てゐるであらう。しかし日本も天才を産み得るのだ。炎熱な印度も釋迦を産み、マホメットもアラビアから出てゐる。日本よりも猶小さい島國のイギリスは多くの天才を出してゐる。隣國の支那は孔子、老子を産むのである。どうして獨り日本のみがそれ程自然に恵まれてゐない事があらうか。

天才は感化を受ける。しかし生きない受け方はしない。それはやがて自分の天才を

咲かせる爲めの肥料のやうなものである。然し咲いた花は最早與へた者の花ではなくてその天才自身の花である。彼の受ける感化に餘計な心配をする暇に自らいゝ感化を吸収する事を學ぶがいゝ。「外國からばかり感化を受けてゐるのは情けない話だ。國辱だ。此方からも感化を與へるがいゝ」と云ふ者もあらう。しかし日本は何を持つてゐたか。武士道を持つてゐたか。それは武士にはいゝものかも知れない。しかし人類はそんなものを要求するだらうか。日本が眞に善い感化を外國に與へるやうになるのは之からである。その爲には日本はもつと教はるべきものを教はり、取るべきを取つて自分のものとしなければならぬ。生長しなければならぬ。日本自ら自信の持てないものを以てどうして外國を感心させることが出來やう。「ある國民が人類に善きものを貢献する爲めには其國民の屬する國の國粹を發揮すべきである。一國には其國の自然、風土、及び夫が産むだ個有の思想習慣と云ふものがある。それが其國の國粹である。丁度藝術家が夫々の個性に従つて各自の道に進み、そしてその特性を發揮す

る事によつて其藝術に獨立の價值がある様に、一國も亦其本來個有の特色を活かし發展させなくてはならない。桃は桃の花を咲かせ、櫻は櫻の花を咲かせ、かくていろいろの花が入れ交ることによつて自然は美しいやうに、世界は各國がその國粹を發揮し合ふことによつて美しくされ、更に互に其美を交換することによつて進歩するのである。そして一國の藝術家や思想家はその爲めに努力すべきである。「かう云ふことを云ふものが少くない。一應尤もな議論に思へる。又それはある處迄は事實だとも云ひ得る。獨逸には獨逸、佛蘭西には佛蘭西、露西亞には露西亞皆それ〴〵その國固有の特性と長所とを自然に備へてゐる。そして其長所が互に他を裨益し合つてゐること、そしてその交換が世界の進歩を助けてゐることは事實である。たしかにもしある國粹にして世界、人類の發展に善き貢献をなすものであるならばそれを發揮させることは大に奨励すべきことである。

しかし國粹がもし發揮されるならばそれは何によつて發揮されであらうか。其國粹

の中に閉ぢ籠つて外來のものを排斥する鎖國主義者によつてであるか、それとも又その國の天才によつてであるか。そして天才は其一國と世界人類と何方を多く心にかけらるであらうか。其一國の眞理と世界及び宇宙の眞理と何方を多く重んじ愛するであらうか。又その一國の意志と世界の意志と何方に多く従はうとするであらうか。

ある一國の國粹と云ふものが人類の立場から見て何れ丈けの性質、内容、價值及び意義を有するものかを慮らない先きにその國の藝術家なり、思想家なりに國粹を發揮することに努めると云ふのはそれ等の者の人類的及び個人的意志を共に無視した云ひ草である。否、それを誤らせるものである。藝術家や思想家こそ人々の要求の性質を正して、それを向ふべき處に向かしめ、その力を増大さすべき者なのである。

もし個人の個性を例に引いた處で藝術家にとつての究極の目的はその個性を發揮することではない。其目的は人類の等しく理想として希ふべき美を自らの中に體得してその實感をより廣き範圍の人々の心に傳へることである。

吾々は個性を持つてゐる。そしてその個性の中には日本人である吾々の祖先の血が通つてゐるであらう。併しそれは現はさうとして現はれるものでなく、又現はさうとするに及ばないものである。それは目的ではなくして自然に現はれる結果であり、又結果の中で重要な地位にあるものでもないのである。同様に吾々の中に日本人としての何かあるならば夫は吾々の人類的努力の上に自ら現はれるであらう。凡てのものは吾々の内にある。そして内にあるもの丈けが生きてゐるのである。吾々は常に吾々の智慧、愛及び深き欲求が指し示す最高なものに就てのみ力を盡してゐればいゝ。生きるべきものは自ら其處に生きるであらう。

恰度藝術家が個性を表現することに努める必要がないやうに、國民としての第一の義務はその國粹を保存することでもなければ、又その爲に努力することでもないことは明かである。人類の等しく求め、努力すべきことは世界を通じて同一でなければならぬ。即ち人類が眞の意味での「幸福の海」に出るやうに努めることである。國

民としての義務は人類の一員としての義務の外にはない。事實自分は嘗て國粹杯と云ふものに就いて考へた事はない。考へる必要がないからである。しかし自分は幸にそんな餘計なものに引つかゝらずに、もつと絶對的なものを對手にしてゐたお蔭で少しは大事なことも知ることが出来たのである。

分りきつたことを長々と述べた氣がする。併し此様な分りきつたことでさへも誤つてゐる人が少くない氣がする。

以上はタゴール氏の來朝に際して感じた處である。自分は今タゴール氏に就いて露骨に議論する氣はしない。只タゴール氏が多くの日本に來る觀光者（ピエール・ロチやバリモント等）の如く、單に日本を世界の珍しい一骨董品として愛せず、同じ日本の歐化を嘆くにしても自分等の美術的享樂物が失はれると云ふ意味で嘆くのでなしに、もつと純粹に日本を愛して、親切に日本の爲めを思つて云ふ處の誠實に感謝する者である。

タゴール氏の説の根本には随分同感も出來、タゴール氏を尊敬することも出来るけれども、ある意見は少し偏頗であつて同感出來ない處があるやうに思ふ。そして其説が日本の國粹論者にもつと淺薄に受け入れられて其結果誤解する者が出來相な氣がするので、此小論を書いて見る氣になつたのである。終りに自分は人々が小さな囚はれた偏見を脱して、もつと直接に、いきなり、人類や世界の絶對的な立ち場に立て、ものを感じ、ものを考へ、ものを見得る様になることを切に望んで筆を擱かうと思ふ。

大正五年七月八日印刷
大正五年七月十一日發行

定價壹圓貳拾錢

(求むる心)
奧付

不許複製

著者 長 與 善 郎

發行者 河 本 龜 之 助

印刷者 河 本 俊 三

印刷所 洛陽堂印刷所

發行所

電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

東京市麴町區
洛陽堂
平河町五丁目廿六番地

長與善郎著

小説 盲目の川

四六判八百頁
定價金壹圓參拾錢

長與善郎著

小説 彼等の運命

菊判六百六十二頁
定價金壹圓九拾錢

發行所

東京市麹町區平河町
振替東京二〇九一四

洛陽堂

200
212

終